

若年層の女性の健康 見つめよう、ココロとカラダ。

北九州市立男女共同参画センター・ムーブが平成29年度に発行した冊子。

思春期から青年期の女性の健康に関して6つの項目にまとめられ、親しみやすい言葉、理解を深めるためのイラストで構成されている。「からだについて」「心のなやみ」「性のなやみ」の3つの項目では自分の体や心を知るために必要な知識(基礎体温、性感染症など)や自分の体や心を守るための知恵を中心にまとめられている。次の「これからのこと」「毎日健康レッスン」ではこの大切な時期を健康に過ごすためのアドバイスやいくつかの解決方法を提示している。そして最後の「こまったときはここへ」ではいろいろな相談窓口をわかりやすく案内している。

思春期から青年期にはからだが成長・発育し、性的成熟や心の成長もみられる。自立した大人になるための移行期間である。そのなかで起こるさまざまな悩み(特にからだ・心・性に関する悩み)について、自分を観察し悩みを解決する手助けとなる1冊として活用されることが期待される。今の自分も、未来の自分も大切にしたいというムーブからのメッセージである。

あんどう ゆきこ
安藤 由起子 (安藤ゆきこレディースクリニック院長)



■ 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 編集・制作
■ 2018年初版

基礎体温

基礎体温とは朝覚醒直後、離床前に婦人体温計を用いて測定した舌下温のことである。基礎体温曲線の様子から月経異常の状態を自分で観察することができる。例えば、低温1相性が続いているならば無排卵である(排卵はない)ことが自身で理解できるようになる。高温相は通常2週間であるがその期間にイライラや頭痛といった月経前緊張症が起こり、月経開始とともにその症状は消失する。また高温相が2週間以上持続していれば妊娠と診断される。現在では基礎体温測定を継続するために若年層の女性ではさまざまなアプリが役立っている。

サフラジェット 英国女性参政権運動の肖像とシルビア・パンクハースト

イギリスの女性参政権運動史でエメリン・パンクハーストは、日本の婦選運動家市川房枝に相当する人物である。二人は共に、男性至上主義が「あたり前」のジェンダー階層社会で、男女平等の政治的権利を要求し闘った運動家だ。しかし、市川が、穏健な対議会活動に終始したのに対し、パンクハーストは、運動の終盤で過激な「戦闘的」闘争を繰り広げ、武闘派フェミニスト—サフラジェットと呼ばれる。

本書は、運動の「暴力的」側面が強調され、ネガティブに評価されがちなかパンクハースト母娘の活動が、なぜ、どのように「戦闘的」闘争へ移行し、どのような社会的効果をもたらしたかを再検証し、サフラジェットの運動に新しい展望を拓いた好著である。運動に参加し、警察のすさまじい暴力に屈せず、投獄・拷問に耐えた「1000人のジャンヌ・ダルク」たちの信念と勇気が、そして7000人の女性を動員したウィメンズ・パラメント等の斬新な活動の数々が描かれる。さらに、母エメリンと姉クリスタベルの戦闘的戦略から離れ、ロンドン東部の貧しい労働者の町に住み、彼らの生活権と参政権を結びつけ運動を發展させたシルビアの活動が語られる。

今日イギリスは、すでに二人の女性首相を輩出し、女性下院議員の割合は3割を超す。一方日本は、女性衆院議員比率が1割をこらうじて超すにすぎない。パンクハーストと市川の異なる戦略が、この違いを生み出したのか。考えさせられる刺激的な書である。

しんどう くみこ
進藤 久美子 (元東洋英和女学院大学教授)



■ 中村 久司 著
■ 大月書店
■ 2017年初版
■ 2,000円(税別)

サフラジェット

女性参政権の運動家は、通常、サフラジスト(Suffragist)と呼ばれ、その運動は主として文書、会議などの啓蒙活動と請願や法案提出の対議会活動に限られる。それに対し、運動に、官公庁の建物や閣僚の住居の窓ガラスの破壊、放火などの「闘争的戦略」を組み入れた「女性社会政治同盟」(1903年にエメリン・パンクハーストが組織)の女性たちを、穏健な女性参政権運動家と差別化するため、「サフラジェット」が造語された。ジェンダー中立的なサフラジストの語尾に-etteを加え女性名詞化し、女性に特化する単語とした。同時に、-etteは「模造品」、「小さい」を意味し、サフラジェットには蔑視が含意された。

日本のフェミニズム since 1886 性の戦い編

北原みりのは買春に鋭く切り込む編集で鮮やかな手腕を見せる。ぎっしり詰まった内容からは想像できないほどの分かり易さとハンディな本書を、官僚のセクハラ事件に「NO!」を突き付けた人に届けたい。

本書には、一夫一婦制の確立、公娼制度の廃止などを訴えた矢島楯子から、「娼婦の火の玉」となった久布白落実、「買春」という視点を定着させた松井やより、金学順が声を上げる前から日本軍「慰安婦」問題に取り組んだ高橋喜久江、そしてAVの性暴力を告発する宮本節子まで、130年の性をめぐる女性の戦いが構成豊かに凝縮されている。

少女買春に待ったをかける仁藤夢乃は、買春を支える、男の性欲=「自然」・「本能」論に対し、暴力的・支配的文脈の動画等の流通で、男性は性欲をコントロールできないと思込まされている、と社会による「作られた欲望」論を対置する。またレズビアン運動史において沢部ひとみは、SOGIによる差別もセクハラ同様に人権侵害となる日は近いかもしれないと予測している。そうならば「女」「男」という二項の線引きは意味が剥落し、「性的」欲望自体も変容せざるを得ないだろう。

このように、買春する権利を手放さない日本社会への批判的な言説が弱まっていることを危惧して編まれた本書から、フェミニズムの新たな可能性を随所に感じた。

とみなが けいこ
富永 桂子 (福岡大学・久留米大学大学院非常勤講師／NPO法人ジェンダー平等福岡市民の会理事長)



■ 北原 みり
責任編集
■ 河出書房新社
■ 2017年初版
■ 1,200円(税別)

SOGI(ソジ)

SOGIとは「Sexual Orientation and Gender Identity」の頭文字を取った語で「性的指向と性自認」を表す。これは性を構成する要素に焦点を当てたものでマイノリティ、マジョリティの区別は生じない。従来セクシュアルマイノリティの総称として使用されているLGBTでは多くのセクシュアリティをカバーできず、また「LGBT当事者」・「非当事者」への二分化などの問題があった。

SOGIの使用は2011年の国連人権理事会で始まり、すべての人が性的なあり方について自分の問題として捉えることに道を開いたとされる。最近、性的指向や性自認に対するハラメントのことを表す「SOGIハラ」という語も生まれた。

「家事のしすぎ」が日本を滅ぼす

海外の生活経験のある日本人は、現地の人の家事が、雑でいい加減であることに驚く。私もカリフォルニアと香港で各一年、生活経験があるが、カリフォルニアではスーパーで売っているのは缶詰ばかり、香港では朝食を家族一緒に外食で済ますのは当たり前、共働き家庭では、家事をメイドにまかせる。

本書は、海外と比較しながら、日本の平均的家事水準、つまり、食事の支度、掃除、洗濯などの水準が高く、構造的に大変にできているというその例を、これでもか、これでもかと示していく。日本では、その高水準の家事負担は、女性の負担とされていることが、女性活躍を阻む一つの要因となっていることが示される。諸外国の女性の職場進出は、女性の家事負担の軽減によってもたらされた。いくら男性が多少分担しようが、そもそも家事が高水準であれば、共働き女性は疲弊してしまうのだ。

といて、家事水準を低下させるのは難しい。食事の手作り神話、物が溢れかえる狭い家、他人に任せる事への抵抗感など、女性が家事プレッシャーから逃れるのは困難を伴う。

「完璧な家事」を維持したまま、女性の社会進出が進むだろうか。本書はそう問いかけている。

やまだ まさひろ
山田 昌弘 (中央大学文学部教授)



■ 佐光 紀子 著
■ 光文社
■ 2017年初版
■ 760円(税別)

手作り神話

昔、「バレンタイン・デーで、カカオから栽培しないと本当の手作りチョコと言えない」とエッセイで書いたことがある。本書でも述べられているように、日本では、何でも、手間暇かけて手作りした方がすばらしいという神話が強く存在している。しかし、それが神話なのは、プロの料理人が作った方がおいしいし、手作りが必ずしも健康的な食材ばかり使うわけではないことから分かる。しかし、日本では、お袋の味から、愛妻弁当、子どもの弁当作りまで手間暇かけることが、女性の愛情表現であるという意識が強い。そろそろ、手作り神話から解放される時期ではないだろうか。